

董康『書舶庸譚』九卷本譯注（一）

芳村弘道

凡例

一 これは、民國期に司法、政治の世界で重きをなし、書誌學者としても高名であった董康（一八六七～一九七四）が、昭和初期に四度、我が國を訪問した際の日記、九卷本『書舶庸譚』のうち卷五以降の口語譯（一部訓讀文）及び注釋である（卷四以前は四卷本『書舶庸譚』を底本とした拙稿〈『就實語文』第十二～十七・十九・二十號〉を參照されたい）。

一 底本は、家藏の己卯（民國二十八年、昭和十五年、一九三九年）季冬、董康誦芬室刊本（董康「課華庵」朱文橢圓印・「寶鼎香濃／繡簾風細／綠窗人靜」朱文方印あり）を用い、二〇〇〇年十二月、河北教育出版社「近世學人日記叢書」王君南整理本を參考した。なお一九七一年九月、世界書局影印本の底本は、「歲次己卯季冬誦芬室重校定」の木記を有するが、庚辰（民國二十九年、一九四〇年）七月の傳增湘序を附した補修本である。

一 譯文において、（ ）内は筆者の注、「〔 〕」は原文外に補った部分であることを示す。原注（原文では小字雙行）は、「原注」と附記し

【 〃 】に括った。一日の記事が長文の場合、適宜、分段した。底本の明らかな誤字は、これを改めて譯し、注を附さないこともある。

一 注は一日の記事末に附した。人名に關する注は、中國人を主として施し、邦人の著名人や本文中に肩書きを記す人物には概ね省略した。なお本譯注は、立命館大學大學院二〇〇五年度「中國書讀」の授業に用意した筆者の原稿を基にし、受講生諸君作成の注も參考して（採録の注は「某君の教示」と記した）、修訂したものである。

書舶庸譚卷五（民國二十二年（昭和八年、一九三三年、癸酉）十一月八日～三十日）

十一月八日【原注：陰曆九月二十一日】

晴れ。またも日本への旅行となる。先頃、東京の法學博士の松本叅治（原文「蒸治」を訂正。以下同じ）などが中國法制研究會^①の上海の法學士、村上貞吉^②を通して司法常次（南京國民政府司法行政部・常任次長）の石友如^③に仲介の勞をとってもらい、私が出向いての講演を頼

んできた。再三辭退したが、聞き入れられなかった。ただし私としても内藤（内藤湖南）・狩野（狩野直喜）・田中（漢籍商、文求堂主人田中慶太郎）・倉石（倉石武四郎）などの舊友と長年御無沙汰していることもであり、また高野山で『文館詞林』が三卷發見されたと聞いており、癸・丁兩年の訪書の仕事^⑤が終えられると思い、そこでその要請を受け入れたのである。村上は、先月のうちに共々出發との手筈を決めていたが、末妹の慎芳の結婚があつたために、一ヶ月ずるずる延びてしまった。そこで村上は書記の大谷を残し、「日本で」私を待つことにした。

かくして私は虞山（江蘇省常熟市）の詩人楊无恙・丹徒（江蘇省鎮江市丹徒區）の孫逸齋・同郷（江蘇省常州市武進區）人の劉錫堂^⑥に同行を求めた。閩中（福建省）の龔禮南のお嬢様の玉徽も旅行團参加を希望した。本日の上海丸の乗船券を購入。六時に起床して、衣服を着替える。玉姬（董康の妻妾）は、「七年前、あなたが日本からお歸りになつた時、わたしは波止場でお迎えに待つていました。遙かかなたをながめれば、滾々と流れる川の流れに船が木の葉のように浮かび、だんだんと近づいて来て、間もなく着岸。その時のうれしさは如何ばかりであつたでしょう。今また江畔でお見送りをするとは思ひも寄りませんでした」という。悲しみ深い言葉である。私は、しばらくの別れだから、と慰める。七時頃、高三分院長の梁雲山・大東書局社長の沈駿聲・親戚の陶蘭泉^⑦【原注：天津より来る】、從弟の少卿および盛綬臣・瞿鳳起が相前後して寓居に集まる。前農次の趙晉は運轉手の高文英に自動車を通して見送りに來させた。玉姬は申寶・雙寶・全寶

（董康の子息達）を連れて雲山・駿聲・晉卿・少卿の車四臺に分乘した。八時、匯山埠頭に到着。遼寧の高直青・閩中の蔡伯崙（未詳）・山左（山東省）の袁景唐（未詳）・河北の查良鑑^⑧がすでに船尾で待つていた。一人一人に握手して別れる。玉姬は兩の目から涙を垂らす。私は耐えきれない氣持ちになり、雲山に頼んで車に乗せて先に歸らした。地方法院長、沈錫慶の弟子の史良（いづれも未詳）が最後にやつてきた。九時、出航。岸壁の諸君とハンカチを振つてお別れする。船室に入り、荷物の置き場を定める。私の船室は一〇五號、无恙たちは一〇七號、玉徽は一二二號。長崎警察署の刑事、三岳春男が乗客の取り調べに來る。私の經歷を大變詳しく知つていた。日本はきめこまかく統治に力を入れているが、この一端をもつてしても驚かされる。晚餐の後、船長が活動寫眞で乗客を楽しませる。

木蘭花慢

木蘭花慢（『詞譜』卷二九 蔣捷詞體）

代閩人送別

閩人に代はり送別す（圈點は韻字）

奏驪歌一曲

驪歌を奏すること一曲にして

情槭槭・韻悠悠^⑨

情は槭槭として韻は悠悠たり

問候潮過發^⑩

潮を候つて過かに發するを問ふ

不因重利

利を重んずるに因らず

可爲封侯

侯に封ぜらるるが爲なる可けんや

凝眸

眸を凝らす

遙思此後

遙かに思ふ 此の後

託雲鬟玉臂儘溫柔^⑪

雲鬟玉臂の儘だ溫柔なるに託さん

離緒未銷眉際

離緒 未だ眉際に銷えず

前塵 幕上心頭。

前塵 幕かに心頭に上る

知不。

知るや不

燕市骨誰酬⁽²⁰⁾

燕市 骨 誰か酬い

鴻雪跡曾留⁽²¹⁾

鴻雪 跡 曾て留むるを

奈棋劫頻更⁽²²⁾

奈んせん棋劫頻りに更まり

風淒太液

風は太液に淒じく

烏集延秋⁽²³⁾

烏は延秋に集まる

工愁。

愁ひに工みなり

低徊翠袖

低徊す 翠袖のひと

伴金僊一樣淚橫流⁽²⁴⁾

金僊に伴ふに一樣にして涙は横流す

鄭重一聲將息

鄭重の一聲將に息まんとし

海天佇盼歸舟。

海天 佇んで歸舟を盼る

別れの曲が演奏され、悲しみに胸はきりきりと傷み、調べが耳から離れません。なぜ潮流を待つて急いで旅立たれるのですか。金儲けのためでもなければ、侯爵に取り立てられようとしてでもないのに。目を凝らし、遙かに思いやると、あなたは行かれた後、ふんわりとした髪や腕を想像し、わたしを思い出されることでしょう。別れの情がまだ消えず、眉根は曇ったままで、以前の事が急に想い起こされます。燕の市場で馬の骨に高い代價を出した人があり、雪上に白鳥が足跡を留めた（ように、昔、北京で才能を認められて業績をのこされた）ことをご存じでしょうか。しかし戦争が頻りに起こり、宮中の太液池に凄まじい風が吹きすさび、延秋門に鳥が集まった（唐の安祿山の亂

を想わせるごとく、首都が混亂した）ため、どうしようもなくなったのでした。悲しみがちで、美しい袖を垂らし落ち着かず歩き回り、「時代の激變に感じて」漢の金銅仙人像と同様に涙が出て止まりません。心のこもった樂聲が収まろうとしますが、水平線のかなたに目をやって、お歸りの船を想い、佇んでいます。

(1) 京都大學大學院法學研究科21世紀COE [NEWS LETTER] No.11 (二〇〇六年三月發行)「研究會概要」掲載の第五回研究會(二〇〇五年一月三日)における西英昭氏「中華民國法制研究會について——我妻榮先生未刊の草稿『中華民國民法物權編(下)』解題」によると、「中華民國法制研究會は村上貞吉の提唱に松本烝治が呼應する形で立ち上げられ、我妻榮・田中耕太郎・小野清一郎をはじめとする東京帝國大學法學部の若手教授・助教授を中心とするメンバーが参加し、1930年ごろより1945年まで、主として中華民國の各法規の譯註作業を行い、膨大な書籍を刊行していた組織である。……會の主たる活動である譯註作業に加えて中華民國の法學者招聘などの事業も行っていた」とある。また西氏には「中華民國法制研究會について——基礎情報の整理と紹介」(二〇〇六年六月「中國——社會と文化」第二一號)の論文がある。

(2) 明治七年(一八七四)生まれ、鳥取縣米子の人。上海日本辯護士會會長、中央大學講師などを務める(鳥取縣郷土人物文獻データベースによる)。昭和十五年(一九四〇)没(西氏「中國——社會と文化」掲載論文による)。著書に『支那歷代ノ刑制沿革ト現行刑法』(一九三二年)等がある(中華民國法制研究會からの編著は、西氏論文に詳しい)。(3)「如」は「儒」の誤りではあるまいか。『民國職官年表』(一九九五年八月、中華書局)によると、南京國民政府司法行政部・常任次長には石志泉が民國二十一年七月一二日任命され、この當時も在任していた(二十三年一月二四日罷免)。志泉、字は友儒。「如」は「儒」との

發音の近似による誤字かと思われる。

- (4) 中華民國法制研究會による今回の董康の招聘、講演會、滯在中の動靜に關しては、外務省外交史料館所藏の外務省記錄に次の三種の文書が遺っている(下記の1・2の存在は西氏「中國——社會と文化」掲載論文の教示による)。

1 JACAL (アジア歴史資料センター) Ref: B05015758600 中華民國法律學者 董康外一名 滿支人本邦視察旅行關係雜件／補助實施關係 第十三卷 (B-H-6) 全五〇畫像

交換講演費補給の名目で、董康に金四千七百圓、通譯者孫湜に三百圓が豫算計上されていること(第二、四畫像)や、講演會(平日午後三時から約二時間)の題目・日取・場所・董康略歷を示す案内(第七・八畫像)、「董康先生ノ略歷」(第一・二・二九・三八畫像)、經費見積書(第一六、一八畫像など)、費用決算概要(昭和九年一月一六日接受。第四三、四六畫像)、董康先生講演會聽講者名簿(第四七、五〇畫像)などから成り、「書舶庸譚」本卷の理解に極めて有益である。

2 JACAL Ref: B05015842900 元民國司法總長董康外一名圖書館等參觀 昭和八年十一月 在本邦留學生本邦見學旅行關係雜件／便宜供與關係／通關、拜觀、觀覽關係 (B-H-6)

董康等の圖書參觀の便を圖書寮・内閣文庫などに依頼する内容(第九、一二畫像)を主とする。

3 JACAL Ref: B05016215300 十二月 外國人來往關係雜集 第二十四卷 (B-H-7)

董康一行の十一月後半の動靜を記す文書(昭和八年十二月二日接受。第二、三、四畫像)。

- (5) 「癸」は癸亥すなわち民國十二年(大正十二年、一九二三年)で、董康は前年八月に財政總長の職を辭し歐米視察に出て、この年、歸航途中、日本に立ち寄って高野山を訪ね、正智院等所藏の『文館詞林』殘存十八卷・殘簡二種を影印した。また「丁」は丁卯、民國十六年(昭和二年、一九二七)で、前年末、政治紛争を避けて日本に渡航、翌年

四月末まで滯在して京都・東京に訪書など行い、四月二十二・三日には『文館詞林』殘卷の確認のため再び高野山を訪れている。丁卯滯在の日記が『書舶庸譚』四卷の内容であり、その卷三の三月一日の條に「跋高野山藏原本文館詞林」を録している。なお、ここいう三卷の新発見は誤聞と思われる、今回の滯在中、一月十・十一日の高野山遊の記事にこのことへの言及がない。『文館詞林』については阿部隆一「文館詞林考」(一九六九年二月、古典研究會「影弘人文館詞林」解題。一九八五年一月、汲古書院「阿部隆一遺稿集」第三卷)が詳細を極め、董康も取り上げられている。

- (6) 陳玉堂「中國近現代人物名號大辭典」(一九九三年五月、浙江古籍出版社)頁二七七によると、本名は冠南、生年未詳、「一九四一年在世? ……」室名拏雲精舍(有「拏雲精舍詩稿」)、又名楊愷(?)。工詩善畫」という。

- (7) 本書四卷本の民國十六年一月十日條などには「北京孫逸齋」として頻出している。閱歷は未詳。

- (8) 注(4)所掲2の文書 Ref: B05015842900 第一一畫像には「董康氏祕書劉英」とあって、名を知る。なお3の文書 Ref: B05016215300 第二一畫像では「劉通譯」と記されている。

- (9) 一九九五年八月、中華書局『民國職官年表』附録の人名錄に「龔湘禮南。福建閩侯縣。(汪偽)立法院立法委員」とある。その委員在任は一九四〇年から一九四四年まで。上海文明書局、一九三〇年『海上名人傳』の「龔禮南先生小傳」は未見。龔玉徽は Ref: B05016215300 第二畫像に「上海西摩路慈惠里一四號、女醫 龔玉徽ハ帝慶各大學醫科產婦人科の視察見學を爲し云々」とあって、産婦人科女醫であったことが分かる。

- (10) 梁仁傑、字雲山。江西臨川の人。一九九一年五月、河北人民出版社『民國人物大辭典』頁八七四に見える。「高三分」は高等法院第三分院を指すが、當時、彼が何省の分院に屬していたかは未詳。

- (11) 號は涉園。一八七一一一九四〇年。實業家。藏書家としての事跡は蘇精「近代藏書三十家」(一九八三年九月、傳記文學出版社)に詳しい。

- (12) 清代の江蘇常熟の藏書家、鐵琴銅劍樓主人瞿鏞の後人。一八九八・一九八七年。版本目錄學に優れ、『鐵琴銅劍樓藏書目錄』の校補・覆校(二〇〇〇年九月、上海古籍出版社)などの業績をのこす。
- (13) 『民國職官年表』によると、彼は民國二〇年五月一日に實業部常務次長に就任、翌年一月六日に免職の経歴がある。
- (14) 『民國職官年表』によると、のち一九四八・四九年に雲南省第一行政督察專員の経歴をもつ。
- (15) 『民國人物大辭典』頁五九五に一九〇五年生まれ、浙江海寧の人として見える法律家か。
- (16) 『逸詩(詩經)未收錄の古代の詩篇』の一編「驪駒」は別離に際して歌われたという(『漢書』王式傳の注)。これに基づき、離別の歌を「驪歌」という。
- (17) 「槭槭」は風が木の葉をゆらす擬音を表すので、「情」と意味が結びつきにくい。「槭槭」は悲哀の様を言う「慼慼」の誤りであろう。
- (18) 世界書局影印本は「問候潮過發」の句を「問潮候江頭」に作る(これによって本影印本の底本が庚辰補修本と判明する)。この詞の脚韻は上下兩片とも平聲十八尤・十九侯・二十幽韻通用の一韻到底。平仄の關係で「問潮候江頭」に改めたのであろうが、「頭」字は十九侯韻に屬し、韻字となる。ただし『詞譜』『詞律辭典』には「木蘭花慢」において、上片第三句に押韻する例を見ない。しかもこの「頭」字は上片末句と重韻になるが、この例もない。
- (19) 杜甫「月夜」詩に「香霧 雲鬢濕ひ、清輝 玉臂寒からん」とある。
- (20) 賢才を求める燕の昭王に對し、死馬の骨を高價で買い取って、却って名馬を得たという古人の策略を郭隗が話し、「先ず隗より始めよ」と自分を賣り込んだ。事は『新序』雜事篇などに見え、後に「馬骨」をもって賢才俊士に喩える。
- (21) 蘇軾「和子由澠池懷舊」詩に「人生到る處知んぬ何にか似ん。應に似たるべし飛鴻雪泥を踏むに。泥上 偶然 指爪を留むるも、鴻飛べば那んぞ復た東西を計らん」とある。過去に留めた痕跡を「雪泥鴻爪」という。

- (22) 『資治通鑑』晉太元三年に「征南棋劫之勢」とあり、その胡三省注に「棋勢を以て兵勢に喩ふるなり」と釋す。棋劫は戰爭の比喩。
- (23) 杜甫「哀王孫」に「長安城頭 頭白の鳥、夜 延秋門上に飛んで呼ぶ。又た人家に向ひ大屋を啄き、屋底の達官は走げて胡を避く」と安祿山軍の進攻直前の長安を描く。
- (24) 李賀「金銅仙人辭漢歌」の序に「魏の明帝の青龍九年八月、宮官に詔して車を牽き西のかた漢孝武の捧露盤仙人を取らしめ、立てて前殿に置かんと欲す。宮官既に盤を折く。仙人載せらるるに臨んで、乃ち潸然として涙下る」という。

九日

晴れ。朝食後、船べりで景色を見る。船旅は快適。午後一時、長崎到着。一行五人で上陸して遊覧。上海の各裁判所に手紙を出し、京都の小林に電報を打ち旅程を知らせる。新聞記者が遮って私に今回の旅行の感想を尋ねる。研究と講義のための招待に應じ、ついでに以前行った所に今一度訪れるだけだ、と答える。ここは軍港で、兩岸に峰々が取り圍み、自然が生んだ繪畫の世界である。大徳寺(廢寺)となって地名のみ残る)に行く。寺には菅原道眞を祭る(梅香崎天満宮を指す)。道眞は日本の歴史上の人物である。忠義がもとで左遷され鎮所で亡くなった。ここがその場所である。人々は哀れに思っ、到るところに神社を建てた。また天満宮ともいう。歸路に鼈甲屋に寄り、鼈甲巻きの萬年筆を二本買い、子どもたちへの土産にする。鼈甲はわが國では玳瑁という。世界では長崎とイタリアが最もよい。また別の店に行き繪はがきを一〇枚ほど買う。髪を切った女性の寫眞を壁に張っている。どれも東京の映畫スターであつた。肉付きといい背の高さと

いい、皆美しい。歐風が東洋に傳わり、身なりの傳染力はめざましい早さである。昔の人が美人を詩に詠うと、たいてい低い髻や高いもとどりに思いを馳せたものである。もし今生まれたら、いつたいどんな名詞に變えてこれを描寫することであろうか。四時に出航。晩に神戸の税關員が入室して詳しく検査する。共產化宣傳を防止するためであった。書籍についてとりわけ嚴重。検査が終わると、ふたたび兵庫縣の特高課の吉川爲藏を介して我々の足取りについて話したが、非常に明白であつたので、私的な受け答えをしただけであつた。夜、博陵君（董康正妻、卷四の四月八日條に見える）が母に従いやつてくる夢を見る。まるで昔の娘婿のような姿であつた。目覺めてから思い返すと、悲しみがいや増す。

水調歌頭（詞譜卷二三 周紫芝詞體）

玄海放歌

玄海放歌

上下玻瓈碧

上下 玻瓈の碧に

著我一扁舟

我が一扁舟を著く

容與周髀之内

容與たり周髀の内

幾點辨沙鷗

幾點か沙鷗を辨ず

人道滄溟灝淼

人は道ふ滄溟の灝淼たるを

私曰滄浪清淺

私ら曰ふ滄浪の清淺

濯足任長謳

足を濯ひて長謳に任すと

東望蓬壺接

東望すれば蓬壺接し

西指是神州

西に指さすは是れ神州

環柱^⑤ヒ

柱を環るヒ

當筵鼓^⑥

筵に當る鼓

足千秋^⑦

千秋に足る

昨宵欹枕髣髴

昨宵 枕に欹りて髣髴たり

大集古人謀^⑧

大いに古人を集めて謀る

既向中流擊楫^⑨

既に中流に向ひて楫を撃ち

更上燕然勒石^⑩

更に燕然に上りて石に勒す

夙負略爲酬^⑪

夙負 略ぼ酬いを爲す

炊熟黃粱末^⑫

黃粱を炊熟すること未だしや

依舊付浮漚^⑬

舊に依つて浮漚に付く

空も海も青いガラスのように廣がる中、我が乗る船はぼつりと浮かぶ。大空のもと、ゆらりゆらりと進み、粒かと思えるのは何羽かのかもめ。人は青海原の廣々とした様子を取り立てて言うが、わたしは滄浪の川の清く浅い方を取り上げた、川の流れが濁れば、足を洗えとの歌の文句に従い〔今の亂れた時代に合わして生き〕たい。東を望めば、蓬萊・方壺〔の仙山に喩えられる日本〕が近く、西に指させば、あちらは神州中國だ。

柱を廻つて逃げる秦王に投げつけた匕首、懼れ憚らず宴席で打った鼓、〔荊軻と禰衡〕いずれも永遠に名を留めるに足る。昨夜、枕にもたれて、古人を大いに集めて計謀をめぐらした。晉の祖逖は長江の中流で楫を叩いて中原恢復を誓い、また後漢の竇憲は匈奴を破つて燕然山に上り功績を石に刻み、かねて抱いた志がほぼ報いることができた。と思つたのは、黃粱が炊き上がらないかどうかの一時の夢であり、す

べて泡と消えて前のままであった。

- (1) 楚辭・涉江に「船は容與として進まず」とあり、『文選』張銑注に「容與は、徐動の貌」と釋す。
- (2) 「周髀」は、蓋天のこと。すなわち天空は柄のない傘、大地は蓋のない皿のようなものであると考える中國古代の天體説。ここでは天空を意味する。
- (3) 杜甫「旅夜書懷」詩に「飄飄 何の似たる所ぞ。天地の一沙鷗」とあって、漂泊の身をうたう。
- (4) 楚辭「漁父」に、屈原に向けて「滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯ふ可し。滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふ可し」と漁父が歌い、世情に合わせる生き方を諭したという。
- (5) 『史記』刺客列傳に記された故事。荊軻が地圖に仕込んだ匕首で秦王を暗殺しようとした。しかし刃が届かず、柱を廻って逃げる秦王を追って匕首を投げたが、それで桐の柱に刺さった。
- (6) 後漢末の禰衡は、曹操の宴席で定めぬ衣裳と帽子に改めず鼓を打った。装束を改めないことを叱られると、御前で裸身になって着替えて鼓を打ち、羞じる顔色がなかった。曹操は「本と衡を辱づかしめんと欲せしに、衡反つて孤を辱づかしむ」と笑ったという（『後漢書』禰衡傳）。
- (7) 東晉の祖逖は、北征の時に長江の半ばで楫をたたいて「祖逖、中原を清する能はずして復た濟らば、大江の如き有らん」といい、中原恢復を江水にかけて誓った（『晉書』祖逖傳）。本書卷二・二月四日條の「讀詩有感」其一にも「伊誰か楫を撃つて中流に誓はん」という。
- (8) 後漢の竇憲は南匈奴の單于を大破し、燕然山（蒙古人民共和国境内杭愛山）に登って、石に刻して軍功と漢の威徳を記した。その銘文が『文選』卷五六に収める班固「封燕然山銘」である。
- (9) 邯鄲の夢の枕で有名な唐代傳奇、沈既濟「枕中記」に基づく。邯鄲の盧生は、道士呂翁から授かった枕に横たわり、黄粱の煮し上がらぬ

間に「寵辱の数、得喪の理、生死の情」を知り盡くす轉變に富む一生涯の夢を見たという。「黄粱一夢」との成語もある。

十日

晴れ。八時、栗島（來島海峡）を通過。海峡の兩岸が對峙し、揚子江の東西梁山^①のようである。潮流がここで急に集まって、波の花が雪のごとく揚がり、渦巻く様は見應えがある。午後三時、神戸に到着。小林（京都で寫眞製版印刷を営んだ小林忠次郎）が長男の長文、辯護士の奥平昌洪を伴い、繫留地に出迎える。遠くから禮をし、すぐに船に乗り込む。握手して御無沙汰の挨拶。うれしさが容易に傳わる。總領事の江華本^②が續いてやってくる。雨岩（蔣作賓）公使が南京旅行からまだ歸っていないことを知る。打ち揃って上陸。車三臺に分乗する。手荷物が煙草專賣局の巡查に留め置き検査される。私は平素から喫煙の嗜好がないのに思いがけないことであつた。詳しい検査を許可して立ち去る。倭林（若林？）旅館に入つて、お茶を飲んで暫く休憩する。田中（慶太郎）に電報を打ち、旅程を告げ、また家に手紙を出す。七時の上り寢臺が既に空いていないと聞く。そこで三宮驛附近の百貨店に行き夕食を取り、九時半の寢臺乗車券を豫約購入する。小林の提案で、まだ時間が早いから、別の列車に乗って京都驛まで行くことにした。二階の食堂で、おしゃべりをして時間待つ。十時ごろ、列車が到着。小林に別れ乗車し、一路東上する。むっとする車内の空氣に苦しめられる。

(1) 東梁山は安徽省當塗縣の長江右岸にあつて別名を博望山という。西梁山は對岸の和縣にあつて、別名天門山という。長江が兩山に挟まれて流れるここを天門と呼び、古來、多くの詩に詠われるが、なかでも李白「望天門山」が名高い。

(2) 字鑑源。湖北鄂城の人。一八八三年(光緒九年)生まれ、没年未詳。國民政府の外交官、一九三三年九月、代駐神戸總領事、翌年六月に駐神戸總領事となる(『民國人物大辭典』頁二二八による)。

(3) 蔣作賓、一八八四年(光緒十年)生まれ、一九四二年没。雨岩は字。湖北應城の人。一九一二年、北京政府の陸軍部次長になるなど、陸軍軍人として活躍。日本全權公使に任命されたのは一九三一年八月で、三年三月九日から一月一〇日まで一時歸國している(『民國人物大辭典』頁一三七四による)。

十一日

六時、起床。列車が國府津(神奈川縣小田原市)驛に停車。車窗は小雨、富士山の姿を見ることができない。八時ごろ東京驛に到着。法學博士の松本恭治・田中耕次郎・瀧川政次郎氏および村上(貞吉)・田中(慶太郎)兩君がそろつて出迎え。一人一人に挨拶をする。田中・村上の案内で麴町區六丁目六番地の萬平旅館に投宿する。新聞記者團が客間に迎え入れ寫眞撮影。田中が歸る。龔(玉徽)女士はしばらく私の姪婿、劉斐の家に泊まる。村上は私を連れて出迎えてくれた諸氏と法學(文學)の兩學界の有名大家のところへ答禮に出る。文學博士の服部宇之吉・帝大總長の小野塚平次・司法大臣小山松吉、および次官の皆川治廣と會う。新聞記者が続いてやってくる。司法省の應接室で一人あるいは三人と集合寫眞に納まる。旅館に戻り、荷物を置く。四階の五二四號室。一宮(千葉縣)の志田(鉦太郎)博士の電報

を受け取る。文面は、機嫌伺いの挨拶であつた。

(1) Ref. B05016215300 第三畫像に「本年陸大卒業ノ劉斐ガ方(淀橋區諏訪町一二八)」とある。

十二日

晴れ。早朝、屋上の花壇から景色をながめると、商店がどこも半旗を掲げているのが見えた。もともと九時に村上を訪問する約束であつた。電話があつて朝香宮妃、すなわち明治天皇第八皇女が逝去されて葬儀が行われ、警備が嚴重で、通行人を止めるので、二時間遅らせて欲しいとの話であつた。車を呼んで出向くと、まだ遠回りになつてようやく村上の所についた。長居して晝食。講演のことを相談する。三時に宿に歸る。志田に返事の電報を入れる。

同行の人々と田中を訪ねるが不在。長男の乾郎君が隅田川堤防に案内してくれる。丁度、競艇があつた。観客は遠くから聲援を送っている。岸邊に高い建物が立つており、競艇の着順判定所になっている。土手沿いは以前、櫻の名所であつたが、震災にあつてすべて焼失した。新しい木を植え足したが、昔の見事さにはよみがえっていない。次に淺草觀音に參詣。乾郎君の話によれば、寺の回りの民家はすべて大火災に見舞われたが、お寺だけが焼け残つたとのこと。それでお参りが盛んで、寺の門前には商店が軒を連ね、半里ほども續いている。みな玩具や安物ばかりである。わが國の蘇州の玄妙觀を思わせるが、押し合いへし合いの人は比べものにならない。階段を上つて參拜。お賽

錢を投げる音が耳から離れない。傍らにおみくじで吉凶を占う係の僧侶がいる。乾郎君が私に九十二番のくじを引いてくれた、无恙は三十二番。どちらも吉と出た。文句は五言の韻語で、一句毎に説明文がついている。後ろには人事が書いてあり、例えば病氣、失せ物、婿取り養子縁組の類。こうした心理には、中日、共通の感情がある。お寺を出て梅園^①に行き、お汁粉【原注：すなわち赤豆湯】と團子を賞味する。風味は、これも蘇臺と似ていた。宿に歸ると、火燈し頃であった。田中が細君と次男の震次君、村上とともに來談。最後に檢察署の外務課アジア係の石井軍治が來たり、經歷を調査して、特別保護該當者であることを示す。みな相前後して歸る。

(1) 今も同地において盛業を續ける甘味處(高石和典君の教示)。

十三日

晴れ。蔣雨岩(蔣作賓)公使が祕書の孫伯醇^①と來訪。公使は私と北京内閣時代での同僚の間柄である。東海の日本で出會い、今昔の感を強くする。昨日の朝香宮の葬儀について詳しく尋ねる。國內外の官吏は皆、國の習慣に従い神を獻じて儀禮通りにお供えをし、皇族の尊い身内なので、式典がたいそう立派であったと分かった。村上が續いてやって來て、伯醇と講演の期日を取り決めて歸る。午後、服部(字之吉)が紹介した法學博士の仁井田陞(原文「昇」を訂正)が來見。私に著書の『唐令拾遺』一冊を贈る。内容は、唐本令「官品」から「雜」まで三十三門すべて七百十五條からなり、漢籍六十四部、和書十一部

から採録されている。博士は年齢が三十歳近くであるのに、文獻探查がかくも博大で、まことに「後生畏るべし」である。三時に神田區駿河町三丁目四番地の龍名館に宿を移る。私は松の三番の八疊部屋、他の人達は辰の二番。萬平よりも閑靜である。无恙たちは大變おもしろがり、疊に座るのを苦痛に感じない。志田が一宮から結構な食品を届けてくれる。みなのお慰みになった。志田が錫堂に、「私と董君とは親戚以上だから、二人の交友の厚さが窺い知れよう」と話した^②。晚餐の後で、乾郎・昆玉(未詳)が無恙たち三人を誘い、淺草に觀劇にゆく。田中が楊鼎甫と共に來談。鼎甫は北平圖書館の司書^③。守和(次條の袁守和)が調査に關する事務の手助けを約束したとのこと。

(1) Ref: B05015758600 第四畫像の「別記經費」に「通譯者孫湜手當(滿州國公使館祕書官)」とある。伯醇は字。『民國職官年表』頁一〇七七に汪兆銘政府の外交部亞州司司長として一九四三年五月任命されている(九月免)のはこの人であろう。

(2) 志田鉦太郎(一八六八―一九五一)は、岡田朝太郎(後の十六日條に見える)などと共に明治三十五年(一九〇二)に清朝政府の招聘を受けて法律制定に參畫した。時に董康も法律館提調等の職に就き、「憲法大綱」を編修するなど法律の整備にたずさわった。兩者の交流はこの當時に始まったのであろう。

(3) 楊鼎甫は、Ref: B05015842900 第一一畫像に見える「國立北平圖書館日本部主任楊維新」。

十四日

晴れ。午後、留學の黃監督(在日留學生監督黃霖)が林祕書を連れ

て來訪。歡迎會を開催したいとの意向であつたが、譯稿整理のため時間が無い。その御厚意に感謝し、今回の來日は北平圖書館〔副〕館長の袁守和^{〔1〕}と共に教育部の任務に當たることであり、袁がこちらに到着してから、諸君と存分に歓談しようと述べる。黃監督達が辭去すると、こんどは學生の代表三人と會見。

（1）袁同禮（一八九五～一九六五）、字守和。一九二九年八月、國立北平圖書館副館長となり、館務を代理し、正式に館長となつたのは一九四五年九月である（『民國人物大辭典』頁六四九による）。

十五日

晴れ。田中が二十四史を貸してくれる。参考用にし、講演の準備を行う。このところ少し讀書執筆に親しむ。午後、村上が講演の日程を送付。變更がまたあつた。四時、无恙と錫堂と一緒に上野に出かけ、勝山〔岳陽〕を尋ね、博物館や美術館に案内してもらう。しかし、すでに觀覽時間が過ぎていたので、公園を出て不忍池まで散歩した。池の中央には辨天堂があり、參拜者が多く、獻燈お線香が盛んに供えられていた。勝山の家に戻り少しの間、腰を下ろす。奥さんと遇う。長く北京と臺灣にいたので、上手に北京語を話す。勝山は龜形の銅製の蓋を出してみせる。背に「河圖洛書」の文様が刻されており、裏には陽文で四行の行書風の楷書四行、「觀象能作卦／採蓍即成爻（象を觀て能く卦を作し／蓍を採りて即ち爻を成す）」二行「貞元四戊辰（七八八年）」一行、「巳日」一行とある。どうやら易者が用いた蓋もので、

身が失われたものである。價格五百圓。残念ながら出來がよくない。値段の交渉をせず歸る。電車に乗つたところ、わずかに須田町までしか行かない。道路が震災後變つてしまつたので、何箇所かで道を聞いて、ようやく宿に着いた。八時、田中が來談。一時頃になつて歸る。

（1）『易』繫辭傳に「河は圖を出し、洛は書を出し、聖人之に則る」とあって、古く『周易』の卦形の源といわれる圖象。

十六日

雨、晝から晴れ。村上が訪れ、一緒に外務省に行き、大臣（廣田弘毅）と有吉〔明〕公使を訪ねるが、いずれとも會えなかつた。祕書の某君は以前、杭州領事であつた。應對が丁寧であつた。六時半、无恙とともに學士會館の歡迎會に出向く。入り口を入つたところで、岡田〔朝太郎〕博士に出會う。握手して喜び久闊を敘す。來會者は文學・法曹兩界すべて七十餘名。大半は著作に富む人達である。瀧川〔政次郎〕・仁井田〔陞〕ともに一座にいる。前司法大臣原嘉道が主席で、歡迎の挨拶をする。日本の法律改革の歴史を述べ、ついで東洋法制研究の必要性を述べ、最後に私の經歷を述べる。續いては蔣雨岩公使から法制を研究することによって兩國がますます親善を深める理由が述べられた。私が謝辭を述べる。また服部〔宇之吉〕、岡田による講演が行われた。本當に大規模かつ熱氣のこもつた盛會であつた。宿に歸ってから、勝山が來談。

十七日

晴れ。夜六時半、蔣雨岩公使の宴會に出席。玄關で臺灣の林光熊に會う。横濱で保險業を經營しており、昔なじみである。劉斐と長崎領事の張翹が同席していた。長崎の商業の近況や華僑の人口を質問した。張の言によると、長崎は九州に屬し、華僑は五千人いるなかで、長崎には約千人がおり、明代に渡來したものが多く、歴史が古く何世代にも互っている。日本人姓を名乗るのが慣習になっており、古くから同化しているので、識別できない。ただ一軒だけが今なお明代の祖先の遺像を保存している。港内には古刹が數箇所有り、崇福などの三箇寺のごときは、みな明清以來、福建・浙江の僧侶が開いた寺で、祖師堂が建立されている。歴代の住持はいずれも中國籍であつたが、現今になつて始めて日本人僧に變つた。九州の火山は、ひとつに阿蘇、今ひとつには雲仙。雲仙は長崎から自動車であつた三時間である。御歸國の折りには、遊覽の御案内をしましょうとのことであつた。九時に劉斐が宿まで送ってくれた。

十八日

晴れ。このところ「春秋刑制考」の草稿を書いている。孫伯醇を引っ張り出して翻譯してもらふ。伯醇は陶心如（陶湘の弟の洙）の妻方の甥で、壽州相國文正公^①（孫家鼐）の姪曾孫に當たる。私の原稿を逐條研究し、群經・諸子について内容を深く理解している。舊家の子弟はさすが竝みの人と異なっている。伯醇を留めて晝食。すき焼きと茶碗蒸し。頗る美味。夕方近く、村上が訪れたところには、すでに原稿が

現代日本語の文章に譯されていた。臨時に講説したところ、相互に了解できないという心配はないようだ。

（1）孫家鼐（一八二七―一九〇九）。安徽壽州の人。光緒帝の師傅を務め、武英殿大學士となる。文正は諡號。『清史稿』卷四四三に傳がある。

十九日

晴れ。九時、孫伯醇來る。譯稿を校正、數箇所の誤りがあつた。彼を誘つて北京亭に行き、晝食。まるで昔の北京の風味があつた。伯醇によると、日本語は今と昔と大きく異なっており、和文は、昔は女性だけが得意にしていた。例えば紫式部が著した『源氏物語』は、意味を理解することが困難なところが多い。この本はすでに現代語に改められているが、往時の情感に合致しているかどうかは一つの問題である。中國から傳えられた書物については、音が吳音と漢音に別れておる。例えば、『文選』の「文」は「孟」【原注・平聲】（meng）と發音し、『文館詞林』の「文」は「蓬（peng）」と發音する。こうした例は枚舉に遑がない。すべて最初に傳えた人の讀み方に基づいている。その區別を日本人に質問しても、詳しい答が得られない。それゆえ翻譯の際、中國の古典の固有名詞については、極めて注意を拂わねばならない、とのことであつた。歸つて鐵保の手紙を受け取る。家中無事、おいの景熙が上海から長崎に渡り、それより汽車に乗り換え當地に來て萬平旅館に宿をとつた由である。^①なおも訴訟が災いしてのことと知る。『老子』のいう「禍福倚伏の理」^②にはもとより定まった運命がある

ものだと深く悟った。

(1) Re: B05016213300 第二畫像に「董康ノ招キニ依リ去月十八日入京シ萬平ホテルニ止宿セル同人ノ孫法律學生 董俞 當二十八年ハ中華民國法制研究會 松本烝治ノ斡旋ニテ司法部及裁判所區裁判所等ヲ視察見學シ」とある。この文書に「孫」とあるのは誤り。

(2)『老子』第五十八章に「禍は福の倚る所にして、福は禍の伏する所なり。孰か其の極まるを知らん」とある。

二十日

晴れ。午後二時半、村上が私と伯醇とを案内し、學士院に行き講演を行う。まず應接室に入り、服部博士と平沼(騏一郎)副樞密院議長と會見。民國十二年(一九二三、大正一二年)に歐米旅行から戻ったとき、平沼は大審院長であつたが、歓迎の宴會を開いてくれた。^①會談中、このことをまだ覚えていた。電報通信社が來て寫眞を撮る。ついで平沼から参加者が紹介された。大學教授が約五十名いた。五時半になつて講演が終了。

今回の原稿では、前の方で『周禮』を論じ、これを成周一代の會要(王朝一代の制度典範などの記事を類別編集した書)と見なした。村上が來ていうには、『周禮』が王莽の僞作にかかるとされるが、日本の學者は非常にその説を信じている。あなたがこの疑問を解決できるなら、願つてもないことである、と。私は、この問題は宋人の議論紛々以來、今に至つてゐる。私の講演原稿に引用した『書錄解題』と『四庫全書總目提要』^④の評論を除いては、斷じて成周時代の撰述と見

なしている。このほか二説ある。○王莽は漢の惡賊であることは誰しもが知つてゐる。二鄭(鄭興・衆父子)は漢の經學の先生であるが、もし王莽の制作であると知つてゐたならば、必ずその注釋を作らなかつた。これは事實上から觀察してみても、僞作と認められない第一の點である。○もし僞作ならば、當然極端に排斥されたであらうし、研究する餘地など無かつたであらう。いまもし『周禮』に反對する人を一堂に集め、三禮を置いて、それぞれの專攻を選擇させたならば、私は『周禮』を選ぶ人が必ずや多いと分かる。その理由は、この經書の注釋がみな二鄭の注であるからである。その時期は、時代を遡ること春秋に比較的近く、すべての制度について、變遷の迹をたどることがな可能なのである。鄧析(春秋鄭の刑名家。『鄧析子』の著者という)や李悝(戰國魏の人。『法經』六篇の著あり)等を黃泉の國から生き返らせ、その得失を問うことはできないけれども、漢代の人の言論が得られるのであつて、壁に向かい空言をこしらえあげるのとは、わけが違ふ。清代に生まれ、遡つて明代の史料について語つたならば、元以前より眞に迫つてゐるようなものである。もし研究する價值がないならば、どうして精神をむだなところにすり減らす必要があるのか。これは、心理上から推定して僞作ではないと見なす又の理由の一つである。英國は世界的な保守の國である。その犯罪による法律適用年齢は完全に『周禮』と同じである。^④私は、昔(一九二二年)、ロンドンに旅行して、たまたま英國王が議會に臨席して、アイルランド自由(國)の宣言をしたことがあつて、控訴院長が朱色の衣服をまとい扈從しているのを見たが、「秋官」大司寇において、その部下に天子の先拂いをさ

せるのと符合している^⑤。どうしてこれが東方傳來の制度でないと知られようか。村上はこの議論をじっくりと講義したら、かならず諸博士が興味をもって聞くことだろうと勧めてくれる。夜、勝山來談。玉姬に手紙を出す。

(1) 原文「治尊浣塵」。「治尊」の「尊」は酒器の「罇(樽)」に同じ。「浣塵」は「洗塵」、旅塵を洗うこと、すなわち遠來の人を歓迎して宴席を開く意味。

(2) 宋の陳振孫「直齋書錄解題」卷二「周禮十二卷周禮注十二卷」に「愚案ずるに、此の書、古文奇字多く、名物度数、攷ふ可くして誣ひならず。其の先秦の古書爲ること、疑ふ可き無きに似たり」という。

(3) 『四庫全書總目』卷一九「周禮注疏四十二卷」に「然らば則ち周禮の一書は、盡くは原文ならざるも、依託に出づるに非ざること、概ね睹る可きなり。……則ち其の秦以前の書爲ること、亦た灼然として知る可し」という。

(4) 『周禮』秋官・司刺に「三刺三宥三赦の法を掌る。……壹赦に曰く幼弱、再赦に曰く老旹」鄭玄注に「鄭司農云ふ、幼弱老旹、今の律令に年、未だ八歳に滿たざる、八十以上は、手づから人を殺すに非ざれば、他は皆坐せず」とある

(5) 『周禮』大司寇に「凡そ邦の大事、其の屬をして蹕せしむ」とある。

二十一日

晴れ。午後、勝山來訪して、平尾贊平^①を紹介する。今週の日曜日に會食しようと約束する。晩に无恙を連れて田中を訪問。无恙は遊びに出る氣持ちを湧き起こし、明日朝、元箱根に紅葉狩りに行くことにする。震二君が案内役を願ひ出た。

菩薩慢(「菩薩蠻」が正しい。『詞譜』卷五)【原注：田中夫人

晴靄女史繪雲山一角便面^②。无恙題此關於上。余亦倚聲。

(田中の夫人晴靄女史、雲山の一角を便面に繪く。无恙は此の関^{けつ}を上^{うへ}に題し、余も亦た倚聲す。)

鐸鈴上界更番續 鐸鈴 上界に更番し續き

蓬瀛方寸羅心目 蓬瀛 方寸 心目に羅ぬ

何處覓樊劉^③ 何れの處か樊劉^{もと}を覓^{もと}むる

山山雲氣稠 山山 雲氣稠^{おほ}し

玉臺耽雅課 玉臺 雅課に耽^{ひび}り

難辨伊同我 伊^{かれ}の我に同じきを辨じ難し

載夢渡吾妻 夢に載せ吾が妻を渡す

而今識仲姬^④ 而今 仲姬を識る

【原注：女史攻繪事已廿年、韶秀如錢叔美。與子祥伉儷尤篤。(女史、繪事を攻^{をさ}むること已に廿年にして、韶秀なること錢叔美の如し。子祥と伉儷尤も篤し。)

菩薩蠻 【原注：田中慶太郎夫人の晴靄女史が、雲間の一嶺を扇面畫に描いた。无恙は此の詞を上^{うへ}に題し、私も亦た詞を作った。】

風鐸が上方で次から次ぎに鳴り續き、仙界の蓬萊・瀛洲の列島が胸中に髣髴とする。樊夫^ふ人と劉綱^{りゅう}が何處かに居そうであるが、山々は雲に包まれている。

玉で飾った樓臺の中、風雅な〔繪の〕練習に餘念がなく、はつきり

とはしないが、その「畫中の」女性是我が妻と同じようだ。夢の中で吾が妻が渡ってきたかに思われたが、今それが女流畫家管仲姬であつたと分かつた。【原注：晴靄女史は、繪を練習してすでに二十年以上になり、錢叔美の繪のように秀麗である。子祥（田中慶太郎の字）と夫婦仲がとても良い。】（上片は扇面畫の雲山を蓬萊の仙山に見立ててうたい、下片は田中晴靄を管道昇に喩え、その畫業を稱えたと解釋した。下片第二句の「我」の意が解しがたい。假に董康の妻と考えた。

第三句「吾妻」は日本の吾妻の地、すなわち東京の意味に重ねたとも解しうる。さすれば下片後半は、中國から東京に渡つて來た夢中の人が管道昇であると分かつたという意になる。後の二十六日條の「萬安樓艷集贈平尾聚泉」詩其一に「吾妻の月色 瓊筵を照らす」とある。また卷八・四月二十四日條の「游仙詩」其四にも「也魂夢をして吾妻を戀はしむ」とあり、自注に日本武尊が東國遠征途中に橘媛を失つて詠んだ歌を引き、「後人因りて東陸を號して吾妻の國と曰ふ」と記している。）

(1)「レート」の名で知られた化粧品會社、平尾贊平商店の二代目社長、初名貫一（一八七四～一九四三）。明治三十一年（一八九八）襲名。古錢の収集・研究家として『新定昭和泉譜』（一九三一～四〇）の名著を三上香哉などの協力を得て編纂した。號は聚泉、室名は麗惠莊。

(2) 田中慶太郎夫人の本名は嶺。なお彼女の扇面山水畫の一つが『文求堂』主人田中慶太郎（一九八七年一月、九一年四月重印、極東物産株式會社田中壯吉）の頁八〇に掲載されている。

(3)「樊劉」は、『太平廣記』卷六〇・女仙「樊夫人」に伝えられる樊夫人・劉綱という夫婦の仙人。本書卷一上・一月十五日條（四卷本は卷

四・四月三十日條）の「小游仙」詩其六に「任他さもあらばあれ 繾綣 樊劉に締す」とある。

(4)「仲姬」は、元の書畫家・詩人の趙子昂の夫人、管道昇の字。彼女もまた書畫を善くした。『圖繪寶鑑』卷五などに傳を見る。

(5) 錢叔美（一七六四～一八四五）、名は杜（初名榆）、叔美は字、號は松壺。浙江仁和の人。人物・山水・花卉の繪に優れ、詩も善くした（『清代學者象傳』卷四・『清史稿』卷五〇四などに傳がある）。